

令和5年度第1回  
第4次武蔵野市民地域福祉活動計画推進委員会  
会 議 要 録

令和5年12月6日（水）

社会福祉法人 武蔵野市民社会福祉協議会

日 時 令和5年12月6日（水）午後6時半から午後8時29分  
会 場 武蔵野市民社会福祉協議会 会議室  
出席委員 宇田川みち子、大屋朋代、川鍋和代、熊田博喜、田中邦忠、深田榮一  
事務局 秋山常務理事、田村事務局長、岡田係長、三藤係長、横山係長、木原主任、  
林主任、後藤主事

（午後6時半 開会）

## 1 開会

○**事務局長** 第4次武蔵野市民地域福祉活動計画（以下「第4次活動計画」）の計画期間は令和元年から6年までです。この推進委員会では、本計画を2年ごとのステップに区切り、3段階に分けて振り返りをお願いしています。今年度はステップ3の初年度ではありますが、武蔵野市で第4期健康福祉総合計画・第6期地域福祉計画の策定や、6年度に第5次武蔵野市民地域福祉活動計画（以下「第5次活動計画」）の策定を控えているなど、振り返りを早い段階から始める必要があります。現在の進捗状況をお配りしました。限られた時間ではありますが、よろしくお願いします。

## 2 委員長挨拶

○**委員長** 令和6年度から第4次活動計画全体を振り返り、第5次活動計画の策定に入ります。本来であれば、2年ごとの振り返りですので、今年度はステップ3の1年目になるため、まだステップ3を振り返られる状況ではないと思いますが、6年度に向けて計画を進めていかなければならないので、本計画で何ができて、何ができなかったかを振り返り、第5次活動計画に活かせるようにする必要があります。そのため、今年度の振り返りは特に重要となるでしょう。第4次活動計画は何と言っても、新型コロナウイルスという社会情勢の中で取り組んだわけですが、いよいよこれが落ち着いた段階で、第5次活動計画では新たな展開を考えていくという形になります。本日は主に基本目標に対して意見をいただきたいです。

## 3 議事

### （1）推進委員会と各計画期間について

- 事務局** 次第裏面「推進委員会と各計画期間との関係」に基づいて説明（略）。
- 委員長** 今後の進め方について事務局から説明がありましたが、何か不明な点はありませんか。

<質疑なし>

○**委員長** 本日と来年2月の次回にステップ3の振り返りを実施して、令和6年5月下旬に計画全体の振り返りをまとめていきます。それ以降に第5次活動計画の策定が始まりますので、推進委員会で話していただいた内容は、そこに引き継いでいく流れになります。今回振り返っていただいたことは第5次活動計画をつくるための基本データになりますので、忌憚のないご意見をお願いします。それでは、議事の2番目、ステップ3の振り返りシートの内容確認について、まずは事務局より説明をお願いします。

### （2）ステップ3振り返りシートの内容確認について ※別紙1参照

○**事務局** 説明（略）。（基本目標1 「地域をささえる人づくり」より（1）地域の福祉情報・ボランティア情報を分かりやすく発信する）

○**委員長** まずは、地域の福祉情報・ボランティア情報をわかりやすく発信するというところで、最終段階のステップ3に到達しているわけですが、ここに関して、質問や感じたことはありますか。

まず私から質問します。基本的に、ここで問うているのは「わかりやすさ」だと思います。参考としている市のアンケート調査は満足度を基準に評価していますが、必ずしも「満足度＝わかりやすさ」ではないと思います。アンケート調査の情報以外に日頃事務局が仕事をするうえで地域住民から聞いた声で、わかりやすくなったなどの意見はありますか。

○**事務局** 日頃より市民社協に関心を寄せている方から改善した変化を感じているという意見もあります。ただ、ここで掲げる満足度50%を達成することに関しては、必ずしも日頃から関心のある方だけでなく、きっかけがあれば情報を得たい方たちに向けて、どのような形で情報を出していくかも含まれます。そのため、情報が十分にわかりやすく届いているか、また、広報の出し方などに関して、幅広い意見を拾いたいのですが、同時に意見を集める難しさを感じています。変化に関していただいた意見の事例として、たとえば、紙媒体の広報紙について、市民公募の広報委員に記事の書き方などを細かく見直していただいています。以前はもっとこうした方がよいという意見を多くいただいていたことが、最近は比較的に良い意味で修正に関する意見が少なくなってきている点を踏まえると、少しずつ改善できているのと感じています。

また、市から委託を受けている子ども支援地域連携強化事業において、子育てに関する情報をまとめた子ども子育て応援ブックという冊子を、令和3年度から市内の小中学校の児童・生徒に配布していますが、市役所を通じて、対象者から高評価をいただいていると聞いています。

○**委員長** 肌感覚として、広報をつくる委員会からのダメ出しが減ったり、作成した冊子について良いという声が聞こえてきたりしたということは、工夫して広報されてきたという指標だと思います。もう一点、満足度50%達成という目標について、どれくらいアクセス数が増えたかやボランティア活動者数が増えたかなどのアウトカムが指標になりますが、コロナ禍で行動制限もあったため、単純に増えたか評価しづらい点もあると思います。コロナ禍が明けた後に一気に増えたという印象はありますか。

○**事務局** 現在はコロナ禍前の状況に近づきつつありますが、明らかにコロナ禍前と比べて、一気に増えたことはありません。それは単純に広報の発信の問題か、ボランティアや市民活動への参加の仕方や意識が変わったのかは、もう少し検討してみないとわからないと思います。

○**委員長** 次の活動計画につないでいくために、わかりやすく伝えた先にあるものが何だろうと考えたときに、「活動への結びつき」があると思います。今後も活動に結びつくようなわかりやすい情報をどう提供できるか念頭に進めていくことが大事かと思いました。

○**委員** 今までの資料を読んできて、第4次活動計画は、市民社協が理想と掲げるところをこれから先、どうつくろうかというようなことを検討しているように見えます。そうすると推進委員会に参加している私たちはどのような立場で話をすればいいのか、非常に迷っています。市民社協の行っていることを批判したり、褒めたりすればいい

のでしょうか。議論したことを地域社協に結び付けていかないと、私がこの場に出ている意味がないと思います。推進委員会で議論した内容が地域社協に戻っていないので、ほかの人に「あなたは（推進委員会で）何をやっているの」と聞かれても、きちんと答えられません。私の立場上、きちんと答えなければならないと思うのですが、その辺りの立ち位置が分かりません。ほかのみなさんはどう思いますか。

また、情報発信のわかりやすさや内容について、アンケート調査結果から、単純に満足度50%が達成できていないと評価しているのだと思いますが、私は市民社協が発信する情報を見て、自分が欲しいと思う情報は手に入っています。昔は欲しいと思う情報さえも手に入らないことがありましたが、今の私のように情報が欲しいと思う人は100%手に入っていると思うかもしれません。関心のない人がアンケート調査に「できていない」「わからない」と回答することで、20%程度になっているのかもしれませんが、単純に数字を鵜呑みにしてはいけないと思います。

○事務局 50%の数値目標は、活動計画を立てたときに、きちんと踏み込んで具体的な目標設定ができていなかったのだと思います。「関心のある人が情報を得るための発信」として評価を考えるのか、そうでない人も含めるのか、評価基準が曖昧だったと思いました。この点は計画をつくる上で大事な点だと思いますので、第5次の計画策定で活かしていきたいです。

また、地域社協との結び付きについてですが、各取り組みの想定される実施主体に市民社協だけでなく、地域社協やボランティア団体も記載しています。地域社協がこの6年間で目標に対してどのようなことができたかは、市民社協の職員から見た達成状況を記載しています。このことについては、推進委員のみなさまからも、「他にもこのようなことがある」「ここが困っていて進まない」のような、実施主体の立場からもコメントをいただければと思っています。地域社協には、推進委員のみなさまからいただいた応援メッセージを、地域社協代表者連絡会などで共有しています。しかし、これを受けて、各地域社協が一つ一つの目標に対して取り組むかは強制しておらず、それぞれにお任せしています。

○委員長 この計画は第3章に地区別の計画、第4章に地区を超えた市全体の課題を記載していますが、この2つのつながり部分が見えにくかったと思います。本当は全体の計画を確認すると地区別の計画にも関係するようになっているはずですが、そのように見えないのは作り方の問題だと思います。地区別の計画を作っている市区町村が都内でほとんどないという前提はありますが、実際に作ってみると全体の計画と地区別の計画が分離している感じがしますので、第5次活動計画の課題として考えたいと思います。

○委員 広報紙についてもいろいろと書かれていて、紙媒体以外にもデジタル媒体など両方出すよという意見が書いてありますが、私たちの地域でも、この前会員に意見を聞いたら、紙媒体ばかりでは読んでいられないという意見を言っていた人がいました。私が活動する地域では、年4回紙媒体の広報紙を発行していますが、そのうち半分を別の媒体にしてもいいと思っています。しかし、同じ人が両方やる力量はありません。だったら人を分けて作ってはどうかとの意見もありますが、このことに対して、

市民社協がどの程度後押ししてくれるのか、力を入れてくれるのか、計画に書いてもらうことはできませんか。

○事務局 地域社協については、別紙2のとおり、重点目標の(3)に「地域社協の発展」という項目がありまして、ここで広報の工夫についても記載しています。各地域社協で取り組むところは、取り組みの主体が地域社協となっている部分に書かれていて、市民社協が地域社協の発展のために取り組むことが、市民社協が取り組みの主体となっているところです。第5次活動計画の際には、市民社協には地域社協の支援でこのようなことをお願いしたいということを記載していければと思います。

○委員 たくさん目標が書かれていますが、「〇〇の部分に対して、このように支援します」と具体的に書かないと、地域社協もどうやっていけばいいかわからず先に進まないと思います。地域社協は元々、私たちが自分たちで立ち上げて作ったものではなく、市民社協が呼びかけて作ったのだから、もうちょっと積極的に介入してよいと思います。ほかの地域はわかりませんが、20年経って、私たちの地域は活動が停滞していると思っています。何をやったらいいかわからないのです。もう少し具体的に書いてくれると力が出ると思います。

○委員長 ここは最終段階のチェックで、それを活かすのは次の計画しかありません。今すごく貴重な意見をいただいている、地域社協の人たちがどのように読めばいいのかわからないということは、この計画の作りに課題があることだと思います。ですので、第5次活動計画では、全体の計画と地区別の計画をどのように接続させたらわかりやすくなるか、また、地域社協への具体的な支援方法をきちんと書いた形で策定するとよいと思います。これは広報に限らず全体にかかわる内容なので、きちんと振り返った方がよいと思いますが、ほかの方はいかがですか。

○委員 私もどういう立ち位置で発言すればいいかわからないところがありますが、私の考え方としては、活動計画を策定した立場として、計画が推進されているのか、推進されていないのか、どこまで進んでいるのかに対して意見を述べる立場だと思っています。そのためには、地域の情報を持っていないと評価がしづらいです。私はコミュニティ協議会からの立場として参加しているので、ほかの委員より把握していない点もあるかと思います。コミセンのことはわかりますが、地域社協の活動にほとんど参加できていないため、地域社協の活動の最近の動きは本当にわかりません。そこを職員に最近の動向を教えてもらって補っていかないと、計画通り推進されているかどうかかわからないと思います。私が今回の推進委員会に参加するにあたってどのようなことをしてきたかという、各ステップでどのような点数がついたかを表にしてみました。その中で、ステップ3になって急に評価が下がっている項目があります。たとえば、ステップ1だと評価が3、ステップ2が4、それなのにステップ3だと2になった項目があります。なぜそうなったのかという、ステップ3の評価ポイントとなっている満足度50%以上が引っかかっているのではないかと推察します。計画自体が非常に高い目標だったという話もあるかと思います。この項目は、ステップ3だけを見たら評価が低いかもしれませんが、ステップ1・2を見ると素晴らしい評価です。ですから、今まで推進してきたことを受けて、ステップ3の評価を上げてもいいのかもしれないという感じを受けるわけです。

話が戻りますが、私たちは計画が推進されているかどうか意見を出す立場だと思いますので、計画の進捗に関する情報を事務局からもらって、評価ができると思っています。また、こういうこともあっていいかという点があればアドバイスする、ここは良いからもっと伸ばした方がよいという点を評価するなどしていけばよいのかと思います。

○**委員長** 今の話で、推進委員会の役割を整理していただいたと思います。私たちはそれぞれ異なる立場から集まっているわけですが、違う立場から計画の進捗状況を理解し、進んでいないのであれば理由が何かを考えます。例として、ステップ3になって急に評価が下がっているのは満足度50%以上の評価が高かったのではないかという分析をいただきました。そのようなことをするのが、私たちの役割であると思います。一方で、計画そのものの作りが良いかどうかは別の議論ではありますが大事なところです。私たちが行うことは策定した計画の評価ですが、評価をする中で、なかなか評価ができない点やなぜこの評価になったのかという点について分析し、委員が感じていることを事務局に伝えていく役割もあると思います。

○**委員** 評価はもっとシンプルでいいと思います。また、効果の検証は評価の議論でよくありますが、相手がどう思うかは検証しにくい点もあります。ものすごく多くの対象に対してアンケート調査をしたらある程度傾向が分かると思いますが、特定のところにしかアンケートが取れないとなると偏った結果になるかもしれないし、人によって感じ方が違う点もあるので、結果にばらつきが出ると思います。広報は目的が相手に情報を伝えることですから、相手にどう伝わったかを意識することは大事ですが、そこに焦点を当てるよりも、自分たちがどのように変えたかという評価のほうがよいのではないのでしょうか。課題に対して一つでも二つでも変えてみた、検証してみたという動作を繰り返すことに尽きると思います。難しい論点ではなく、変えた事実が大事だと思います。たとえばWEB媒体をやるという目標を立てたとしたら、6年間かけてできていればよいではないのでしょうか。各地域社協が6年間かけて月に10回出すという目標を立てたのなら、その方法論はあると思います。今後の課題として、第5次活動計画をつくる時にはそのように目標設定をすればよいと思います。

それから、一つ質問で、「(1)地域の福祉情報・ボランティア情報をわかりやすく発信する」の評価について、①が3で、②と③が2になっていますが、なぜこのような点数を付けたか理由を知りたいので、補足をお願いします。

○**事務局** チラシや広報紙は、様々な団体で取り入れられている広報媒体なので、それを改善していくという点ではある程度目標に向かって積み上げていると感じていますが、それ以外の媒体は、必ずしもボランティア団体も含めて進んでいない状況があります。そのような点も含めて、②と③は評価2としています。また、調査そのものについても、当初計画を策定した際に踏み込んだ質問ができるかを想定せずにチャレンジしたい項目として記載したので、予算などの実状から想定したほどの大規模や細かい調査など、思い描いていた調査が難しいということがありました。

○**委員長** 先ほどの委員の質問から2点ほど指摘をいただいたと感じていて、1つは、別の委員も仰っていましたが、計画の作りが十分でなかったという点です。このことを受け止めてどう次につながるかが大事だと思います。もう1点、評価の仕方そのものを

悩みながらやっているのが事実で、今回市民社協として初めて評価に取り組む中で、挑戦的に取り組んでいる点もあると思いますから、うまくいかないこともあるでしょうが、そこを改善していくことが大事です。本来、計画策定と評価は一体的に行うものですが、これがなかなかうまくいかないこともあるのは事実で、推進委員のみなさまには試行錯誤しながら進めていくことをお許しいただきたいと思います。しかし、意見を言わないでほしいということではなく、お気づきの点はどんどん意見を出していただき、次につないで、よりよい計画を作っていければと思います。(1)はここで区切らせていただき、次に進めます。

○事務局 説明(略)。(基本目標1 「地域をささえる人づくり」より(2)より多くの方が地域の福祉に関心を持つ機会を増やす)

○委員長 「①地域活動やボランティア活動に対する理解を広め、様々な形で地域に出会うきっかけをつくりましょう」について、評価が2になっていて、評価理由が「初めて参加した人などに十分な意見を聞く機会を設けた上で、呼びかけの工夫を行っていない」となっていますが、呼びかけを行っていなかったのですか。もしそれが事実であれば、なぜ行っていなかったのかと考えているのか教えてください。

○事務局 まず初めて参加した方にどうだったか感想を聞くということがあまりなかったことと、様々な形を工夫しているのかとなると、3の「着実に進んでいる」とは言えないため、2と評価しました。

○委員 ①の達成状況や振り返りについて、「地域社協については、役員募集以外の呼びかけを行っているところもあるがー」とありますが、私が参加する地域社協では、役員が若返ったことで、運営委員会等でWEB媒体での参加などを取り入れるようになりました。また、総会では今まで参加したことがない地域の方もWEBで傍聴できるような取り組みを新しく取り入れました。そういった点では、工夫して取り組んでいると思います。②については、地域の小学校の理解を得られて、小学校が地域で活動している団体を巻き込んで、学校のフェスティバルの中で、子どもが自主的な研究を発表する場で、地域団体もPRさせていただくことができました。地域社協は防災に関する取り組みを展示したところ、子どもや保護者の方たちに「地域の団体でこんなところがあるのか」と知っていただくことができました。この活動は、継続できるという話になっています。こういう取り組みもあるのかと思いました。ただ、学校への交渉は、学校長の理解などが必要になると思います。

コミセンのお祭りで行うパネル展示以外でも、防災グッズの工作などを通して直接子どもたちと触れ合っ、地域の中で地域社協を少しずつ理解してもらう取り組みを行っている地域があることを紹介できたらと思いました。

○委員 取り組みが進まなかった一番の原因として、コロナ禍で呼びかける機会が少なかったことがあると思います。私の住む地域では、地域のお祭りを毎年計画していますが、台風や新型コロナウイルスなどの影響でなかなか開催することができませんでした。ステップ1・2の評価段階は、開催できなかった期間のため、取り組めなかったという評価だったと思いますが、祭りも昨年度から再開し、今年度は市民社協も含めて様々な地域の団体がブースを出展し、盛大に行うことができましたし、地域社協の

活動ももう少し盛んに取り組まれたのかと想像するので、ステップ3の評価をもう少し上げてよいと思います。

○委員 子どもとのつながりについてですが、私の地域活動の例として、学校から頼まれて4年生との「花植え」や2年生との「昔遊び」などに取り組んでいます。活動の時には、地域社協の活動や歴史を話しています。そして、「子どもたちとのつながりを持って、顔見知りになりましょう」「何かあったら手伝いますよ」と声をかけています。地域と学校と子どもが上手につながっていることで、私自身としても子どもたちが顔を覚えて声をかけてくれるなどの嬉しさもあります。そういうつながりを地域社協として大事にしたいと考えています。

○委員長 子どもとのつながりは、着実に小地域単位で進んでいると思います。一方で子どもとのかわりは学校との関係が大きく、学校の判断に左右される点もあると思います。今後の計画を立てるうえで、子ども・学校との関わりがぶれることなく取り組むにはどうしたらよいかということが一つ課題です。次に進めます。

○事務局 説明（略）。（基本目標1 「地域をささえる人づくり」より（3）地域活動の担い手を増やす）

○委員長 地域社協が始まって20年ほど経って、その間若い世代が入った地域もあると思いますが、新しい人が入った地域とそうでない地域があるとしたら、その違いはどのようなことがありますか。マンション群が建って転入者が地域にたくさん入ったなどの外的要因もあると思いますが、地域社協の運営の仕方、若い人を受け入れやすい何かがあったなど、理由を分析していく必要があると思います。今後の方向性として2つのやり方があり、旧来の地域社協の進め方を継続するか、若い世代が入りやすいような新しいしくみをつくるかという2択です。そこをどのように考えていくのかの岐路に立っていると思います。20年というひと昔前と言われるくらいになるので、改めてあり方を考えていく必要があるでしょう。たとえば、自治会や町会というシステムが厳しい状況になっているのは事実ですが、地域社協が同じようにならないようにするためには何が必要なかを考えていくことが大事だと思います。今のままのやり方でなんとかなるのではなく、改めてどうしていくのかを考えていくことが大切です。この意見について、なにか発言をお願いします。

○委員 担い手集めが先ではなくて、何をすることを前提に担い手を探したほうが良いと思います。「新しい人が入らない」と言いますが、「入ったら何をするのか」と聞かれます。魅力的なことをしていれば新しい人は入ってくると思いますが、ただ参加してと声掛けをしても、具体的に何ををお願いするかを明確にしないと参加してくれないと思います。私たちの地域では、15年前くらいに幼児を集めて保護者と一緒に遊ぶという活動を始めたら、20名くらいの参加がありました。今はコロナ禍のせいもありますが、だんだん減ってきて、今は1組程度になりました。これはもう昔のようにふっと20組には増えません。というのも、0歳から子どもを預かってくれるところが周りにできてきたのです。そうすると子どもたちを2～3時間見てくれるなら、お金を払ってでも一日見てくれるところに預けて働きに出る選択をする方も多いでしょう。私たちは元々70歳代の人たちで始めて、さらに高齢化していますから5～6時間も見てられません。今は60歳代でも働いている人が多いので、なかなか地域社協に入ってきて



ません。魅力的なことをやらなければというけれどもその案が出てこないのです。今続けている子育てひろば活動を続けたいという案と、ひろばをやめて違う活動に転換してはどうかという案で分かれています。私はコミセンと一緒にできる活動は一緒にやっても良いのではないかと思います。コミセンでも子育て広場活動を30年やっていて、私も参加しています。昔に比べると参加者は少ないですが、それでも30名くらいの参加があって月1回ですが、活動しています。そのような広場で、この間コミセン祭りのときによく動いている方を見かけて声を掛けたら、「ボランティアセンターから紹介されてきました」と言っていました。コミセンでさえも担い手が足りない状況だと思うので、地域社協と一緒にやってはどうかと思いますが、いかがですか。

○委員 担い手不足は様々な団体で考えている問題だと思いますが、行政に携わる人たちにも、市としてこの問題をどう取り組むのかをもっと考えてほしいと思います。社会状況が変わっているというのは何年も前から出ている話で、人を集めるのは難しいと思っていますが、なんとかしなければいけない問題ですので、参加する機会を作っていければと思います。また、地域社協とコミセンと別々ではなくて、共同でやっていけないといけないところもあると思います。

○委員 おっしゃるように社会状況が変わっている点をもう一度抑えておく必要があると思います。共働き世帯の増加や70歳くらいで働いている人が増えるなど変化していますし、地域社協でも設立当初の27年前から携わっている人もまだ現役で活動している状況なので、地域で考える高齢者は80歳くらいからなどと位置づけを見直しても良いかもしれません。

また、いろいろな活動を試してみようと思うのですが、若い人がちょっとしたお手伝いをお願いされて手伝ってくれるとき、その源流に自分たちにとっても楽しいかどうかのポイントにあると思います。もちろん理由はそれだけではないと思いますが、私たちが提供できるのも、参加して楽しんでもらえることしかないと思っています。一度参加して楽しかったら、またお願いしても手伝ってくれるかもしれません。また、担い手の話をするたびに「若い人、若い人」というのもそろそろ飽きてきたので、地域は高齢者でがんばりましょうと腹を括ってやるなど、視点を変えながらやっていくこともあると思います。

○委員 私の地域の地域社協の役員はほとんどが仕事をしており、中高生の子どもがいる方がほとんどです。そのため、設立当初とは違い、役員会もWEBを活用したり、定期的な会合を土曜の午後に開催したりと若い世代の人が参加しやすいように変わっています。担い手というところで行くと、子育て世代はPTA等の関係で横のつながりがあるので、「ちょっと手伝って」と声をかけると、そのくらいならと手伝ってくれています。ほかの地域の話を知っていると、地域によって温度差があるようなので、私たちの地域は少し特別なのかなと思います。一方で、私たちが今までやってきた経験などの視点から話をすると、若い人たちもそういう視点もありますねと聞いてくれ、ちょっとしたやり取りでもうまくいっています。最初はそこまでうまくいくか心配だったのですが、動き出してくるとだんだん周りも動いてくるので、地域活動は60～70歳からと考えなくても、そのうちうまく動き出すので大丈夫ではないかと思います。

- 委員長** 担い手を発掘するということで、地域社協やコミセンはポイントになると思いますが、一括りに地域社協、コミセンと言っても状況は一律ではなくて、地域によって状況に差があると思います。ですので、第5次活動計画では、そのあり方をどう考えるか確認した方がいいと思いました。また、この項目は地域活動の担い手を増やすということで、一般的なボランティア団体も含まれると思いますが、ボランティア団体は増えていますか。
- 事務局** コロナ禍では新しい団体が増えるということはほとんどなかったのですが、コロナによる活動制限が緩和されて、これから状況も変わると感じています。ボランティアセンターに関係する団体や、活動会員登録をしている個人の中に若い世代の方もたくさんいるので、人がいないわけではないと実感しています。先ほど、活動した結果楽しかったことがきっかけになるという話がありましたが、ボランティアセンターへの依頼に対する活動者紹介の傾向としても、自転車整理のような周辺作業をずっと任される活動はなかなか応募がありません。参加するボランティア活動者もなにか力になりたいと思っているけれども、自分も楽しめるといことは大事だと思いますので、ボランティアを受け入れる側でも工夫が必要ではないかという話をしています。ボランティア団体はすごく増えている印象はありませんが、一方で年代が偏っていることもありません。
- 委員長** 学生も「使われている感」があると、すぐ引いてしまいます。
- 事務局** 依頼する側もそのような作業を依頼しがちですが、新しい担い手を募集する上では、そのやり方は違うと考えています。受け入れる側の戦略として、「行ってみたら楽しかった」と感じてもらえるような募集の仕方をする、また行きたいと思ってもらえると思います。
- 委員長** 人材が枯渇しないように、地域に出てもおもしろくないから地域にもう出ませんとならないように、楽しい活動を増やそうと目標を設定してみるなどいいかもしれません。ただ、いずれにしてもコロナ禍で数年活動が動いていないことを考えると、今後のこととしてどうするかはまた議論が必要です。
- これは他市の大学の多い地域の話ですが、コロナが明けて、ボランティア活動者がかなり増えたところがあります。その理由として、コロナ禍で抑圧されていたのが、制限緩和されて一気に参加するようになったということがあるようです。武蔵野市内や近隣の大学でも、抑圧されてきたものがちょっと外れてきて、以前よりも活性化してきているかもしれません。本学でも、「地域に出てみたいけど、どこに行けばいいのですか」という話が出るので、とにかくボランティアセンターに行ってくださいと話しています。大学教員側でも地域活動を推して、大学生を地域につないでいきたいと思っています。若い層というと、大学はやはり外せませんので、そこの連携も考えていく必要があると思いました。では、次のテーマをお願いします。
- 事務局** 説明（略）。（基本目標2 「人がつながる地域づくり」より（4）「顔の見える関係」をつくる）
- 委員長** 転入者と言いますと、武蔵野市は集合住宅より戸建てのイメージが強いのですが、集合住宅は増えているのですか。またタワーマンションのような高層、大規模の集合住宅はどれくらいありますか。

- 事務局 データ上は7割が集合住宅です。高層ですと、三鷹駅の北口に大きなタワーマンションがあります。また、高層ではありませんが、世帯数が多い大規模の集合住宅では、中町や桜堤に300~400世帯の集合住宅があります。武蔵野市は人口がしばらく13万人で推移していたのが、近年14万人台に増えたのは、桜堤等に規模の大きな集合住宅ができたことが原因ではないかと思います。
- 委員長 武蔵野市に住む方の多くは集合住宅の方が多いですね。従来武蔵野市ではあまりなかった「大きな集合住宅ができてみんなが住まう」というような形態が今後増えていく可能性があると思います。そうすると、そのような世帯とどう付き合っていくのかということが一つの課題です。また、若い層が大学や仕事の関係で住んでも、また出て行ってしまうということもありますので、そのような新しい住民層とのかかわり方も考えておいた方がいいと思います。
- 委員 私の地域は、100世帯以上の大規模集合住宅は1棟くらいしかありません。それから、私の家の周りは戸建12棟のうち、半分は前住んでいた方が売られて、新しい方が入っています。そのような方々へのアプローチとして、私たちは回覧板で広報をしているのですが、ただポストに入れるのではなくて、インターホンを押して直接お話しし、地域社協の成り立ちを説明したり、具体的な活動を伝えて協力をお願いしたりしていきたいと考えています。その前段として、最近、広報紙配布に協力してくださっているサポーターの人たちとの懇談を実施しました。7つの小地域に分けて民生委員が中心となって地図を広げ、ここはもう住んでいないとか一軒一軒確認したので、新しい人の家にこれからアプローチしていきたいと思っています。吉祥寺本町の転入者の年齢層は60代などあまり若くはないと思います。土地を購入して家を建てるとなるとある程度の資産が必要なので、長年住んでいた場所を売却して移り住んでくるなどして転入してきた方が多いと思います。
- 委員長 転入者も、そこまで若い人という括りではないですね。そうすると、そのような層にどうアプローチするか考える必要があります。若い人ですと、たとえば子育てのようなキーワードで接点を持つことができますが、子どもが自立してもういない世代の人たちと新しい関係性をつくって、地域社協に入ってもらうには、また戦略が必要です。
- 委員 私の地域の福祉の会は長年「ご近所のつどい」を行っています。本来ならば、防災の観点等も考え、「お互いに顔見知りになり、力を合わせ助け合うことが大切」の思いから始まりました。道筋毎にやれると良いねと声をかけるも、なかなかご近所同士のお付き合いも難しいです。  
新築された100世帯以上のマンションに声をかけ、近くの公園で開催したところ、思った以上に多くの参加があり、企画としては成功しましたが、しかし、新たな担い手の獲得には結びつかないのが現状です。これからも小さなグループから声をかけ、新しい芽生えを信じて地域活動を続けることが大切と思っています。
- 委員 私の地域はマンションが多いところですが、同じ町内でも丁目によってマンションが多いところと戸建てが多いところがあるのですが、戸建ての地域はお互いに顔が分かるから近所で声をかけやすい一方で、マンションのところは二重のオートロックになっていて顔を合わせるのも一苦勞です。また、外からチラシを入れたくても、どこ

にポストがあるのかわからないマンションもあるし、外部から来ている管理人にチラシは一切お断りですと断られて、ポスティングですら難しいことがあります。「地域の防災に関する大切なお知らせです」と伝えても、断られた経験もあります。昔のマンションでは、マンション内の挨拶がありました。最近はそのもないので、エレベーターで一緒になってもこの人は何階の人だろうと悩んでしまう状況で、実際わからない方のほうが多いです。そのため、チラシを配ったり、声をかけたりといった方法を考えても配れない現状があります。ただ、新規の入居者には子育て世帯も多いので、近隣の小学校の児童数が増えているようです。同じ町内でも1丁目から5丁目までで様子が違うので、声掛けが難しいと感じています。

○**委員長** 話を伺っていて、住まい方が多様化していて、年齢層が広がっているようですので、一枚岩的なかわり方では難しいことが分かります。共通性があればつながりやすいのですがそうではないようですし、たとえば共働きだと日中いないことが多いので、その世帯とどのように接点を持てばいいかも課題になります。改めて顔の見える関係性をつくるときに、どう進めていくかもう一度考える必要があると思います。一つ可能性があるのは、何か開催すると集合住宅の方も集まってくれるという話がありました。しかし、次に進むのは難しいという課題もあるので、そこをどうするか検討が必要です。はじめからほっといてくださいというところは一番ハードルが高いと思いますが、住民の段階に応じてのかかわり方を検証しておくことも大事かと思いました。

○**事務局** 説明(略)。(基本目標2 「人がつながる地域づくり」より(5)人と人がつながる「場」をつくる)

○**委員** 私も居場所団体の一つに参加していて、講座などの企画を通して、参加者を増やすことも一つ目標にあります。講師を呼ぶことで新しい関係が生まれていると感じています。講師を引き受けてくれる方は、地域や社会をよくしたいと思っている方が多いので、そのような人とのつながりをつくるという視点も意識していくことが大事だと思います。参加者が増えたかという視点はたしかに大事なことです。参加者が変わらないからいけないということだけでなく、参加者が別の活動に講師を呼んだり、団体同士で連携したりと、新しいつながりに波及することもあると思うので、多面的に見ていく必要があると思います。

○**委員長** 居場所の数をただ増やしてだけでなく、今ある居場所の質を高めていくという視点も重要です。増やすことも大切ですが、居場所も市内で一定増えてきていると思いますので、増やすことだけに専念せずに、今ある居場所の充実のための働きかけも大事だと思いました。

○**委員** 今居場所はいくつくらいあるのですか。

○**事務局** 身近な地域の居場所づくり助成を受けている団体は8団体です。それ以外にも助成を受けないで活動している団体や地域社協が行っているサロンやいきいきサロン、子ども食堂等の活動もあり、それらも含めると把握しているだけで50~60くらいの団体があるかと思います。

○**委員長** 取り組むバリエーションがもっと増えるといいと思います。以前、墨田区にある「岩田屋商店」という活動を見学しました。酒屋の店主が社会福祉士を持っていて、

角打ちで地酒など堪能しながら、相談ができる場を開くというしくみで運営されています。居場所も色々な作り方があっていいのだと感じました。武蔵野市は趣味人という趣味・特技がある人が多い街なので、私たちが日頃考えるふれあいいきいきサロンのような形態だけでなく、特異な趣味・特技がある人にも働きかけて、多様な形で展開されると楽しいかと思えます。

○委員 地域福祉ファシリテーター養成講座に私が参加している団体の代表が毎年講師として呼ばれているのですが、新しい団体は生まれていないのかと思っています。講座では、活動を計画するときに、きちんと計画を立てて、すごい講師を呼んでと、すごく立派なものをつくらうとしています。最初に高い目標を設定すると、後々重荷になって続きません。初回もできないうちに頓挫してしまうグループもあるでしょう。私たちのグループが長続きしている要因としては、運営している人たち同士の仲が良いことがあると思います。自分たちが集まりたいから集まろうとなります。地域活動もあの人に会えるから行こうというような同じ要素があると思います。最低10人以上などノルマを課すと運営したい人も引いてしまうので、集まって始めることを評価してもよいと思います。そこでたとえば社協の職員がお客さんとして行くうちに、自然と根付いていくのではないかと思います。

○委員長 楽しさが核にないと、無理やりやらされている感では広がらないので、おもしろい活動を応援するという視点は、次の計画の柱のひとつになると思います。人が集まらないけれど、集まって楽しいというところから新しい化学反応を起こして、人を呼ぶ企画になるかもしれません。少なくとも運営しているスタッフがおもしろいと思っていなければ誰も行きたいとは思わないので、その視点は大事だと思いました。

○委員 気楽な居場所、特に高齢者の居場所は武蔵野市内にたくさんあると思います。たとえば趣味で集まったメンバーがコミセンに集うなんていうのはよく見かけますが、これも一つの居場所ですね。私も最初地域の居場所は自宅しかありませんでしたが、コミュニティ協議会に入ったら自分の居場所が増えて、お酒を酌み交わすところも一つの居場所だと思いますし、地域に入れば高齢者はけっこう楽しく生活できると思います。

○委員長 コミセンは、一つの居場所ですよ。地域社協も一つの居場所であることは間違いないですし、テンミリオンハウスも居場所と捉えれば、武蔵野市は計画的に広げてきたと思います。ただ、時代によって求められる居場所はもっと多様化しています。たくさん増やしていくことでどこかにニーズの合う居場所があるというねらいで市民社協が居場所づくりを推進しているという解釈でしょうか。今まで作られてきた居場所も大事にしながら、新しい居場所を応援していくことも大事だと思います。また、居場所を経由して地域に出ていくことの大事さを発信していくことも大事だと思います。

○事務局 最後に、本日議論いただいたテーマに対して、欠席された委員からいただいたコメントを紹介します。

まず、基本目標1 「地域が支える人づくり」の(1)の「①チラシ・広報紙などの内容を改善しましょう」について、チラシや広報紙の効果検証は何らかの形で必要だと思います。例えば、新規会員になった方のうち、チラシや広報紙を見て入会した方

がどの程度いるのかなどをヒアリングしてほしいです。そのような検証ができれば、どのようなアプローチが効果的かわかり、情報のわかりやすさにつながると思います。次に、同項目の「②対象を明確にした情報提供を行いましょう」では、X（旧Twitter）を効果的に活用している地域社協や団体があれば共有していただきたい。地域特性もあると思うが、好事例を共有したうえで、横展開していけるとより良い取り組みができるのではないのでしょうか。

（２）の「②子どもが地域福祉に出会う機会を増やしましょう」については、子どもがきっかけで保護者を、また、保護者がきっかけでその親を、というような形で、多世代を巻き込んでいく取り組みができるとよいと思います。若手の取り込みに成功している地域社協もあるので、その要因が何か、また反対に入りにくい要因が何か共有できるとよいと思います。

（３）の「②働いている人が参加しやすい活動方法を目指しましょう」では、企業と連携できた取り組みの事例を共有していただきたい。企業の社会的責任（CSR）として、地域団体との連携を提案していただけたところもあると思いますが、どのように連携して取り組みを出せるか、メニューの好事例を探る必要があると思います。

基本目標２ 「人がつながる地域づくり」の（４）の「①住民同士が出会い、顔見知りになれる機会を増やしましょう」について、防災や防犯の観点から緊急時に備えた顔の見える関係は大切であると考えます。一方で、社会情勢の変化により、むしろ顔の見える関係を避ける価値観を持つ人もいると思います。そのような方に対して、どのように地域に巻き込んでいくのか検討が必要だと思えます。

## 5 事務局からの報告事項

- 事務局 次回の推進委員会では、基本目標２の後半および基本目標３のステップ３と、別紙２に記載している重点目標についてご意見をお願いします。
- 委員長 本日配布している資料が軸になるようですので、次回またご持参いただいて、ご意見をいただきたいと思えます。それでは次回の日程を事務局から確認しまして、終了といたします。

## 5 次回日程について

第２回推進委員会：令和６年２月２１日（水）午後６時半から８時半  
武蔵野市民社会福祉協議会 会議室にて開催

（午後８時２９分 閉会）

---